令和２年度　第１回外部評価懇談会議事録

○日　時　　令和２年９月 17 日　10:00～12:00
○会　場　　オンライン（Teams）開催
○内　容　　「本学オンライン授業の取り組み」
○出席者（外部評価委員）
川島　啓二　氏（京都産業大学 学長特命補佐・共通教育推進機構教授）
菊池　重雄　氏（玉川大学 名誉教授・特任教授）
杉谷　祐美子　氏（青山学院大学教育人間科学部教授）
（本学）　島田昌和理事長、島田燁子学園長、櫻井隆学長
福井勉副学長（教学担当・内部質保証委員長）、亀川雅人副学長、上村佳世子副学長、鵜浦裕外国語学部長、絹川直良経営学部長・内部質保証委員、椛島香代人間学部長、川良徳弘保健医療技術学部長、新田都志子経営学研究科委員長、桑子順子外国語学研究科委員長、小栗俊之人間学研究科委員長、望月久保健医療科学研究科委員長、小林剛史 GCI センター長・学長補佐、山﨑敦教務部長・内部質保証委員、飯島史朗学生部長、木村浩則学長補佐、藤谷克己学長補佐、各学部教務委員・内部質保証委員（池田芳彦教授、浜正樹教授、西方浩一准教授、文野洋准教授）、馬渡一浩広報委員長、甲斐田きよみ准教授、関貴行准教授、竹内秀和副理事長・法人事務局長、森岡俊也統括ディレクター・本郷キャンパスディレクター・法人福事務局長、森村幸夫統括ディレクター代行・ふじみ野キャンパスディレクター、橋本博幸法人総務部長、佐伯透キャンパスディレクター代行、吉村郁夫キャンパスディレクター補佐、簗取清キャンパスディレクター補佐、角田千春キャンパスディレクター補佐、田中綾子キャンパスディレクター補佐・IR 推進室長、三俣正治学生支援センター長、五十嵐康雄学生支援センター長、岩坪充雄学生支援センター長補佐、島田美紀 GSI 統括マネジャー、佐々木稔教務マネジャー、野見山昌子教務マネジャー、山下和宏教務マネジャー、大島拓也教務マネジャー、國守浩輔教務マネジャー、中西明社会教育マネジャー（記録）、石井賢一郎社会教育マネジャー補佐（記録）
※本学出席者は Teams【外部評価懇談会】メンバーリストをもとに作成

1.挨拶（学長　櫻井　隆）

本年のテーマは「本学オンライン授業の取り組み」であり、本学においては前期・後期とも原則オンラインで授業を行うことが決定された。その中で学生の勉学意欲を損なわないためにどのような方法が考えられるか、手探りの状態で今日まで実施してきた。

資料に沿って、まず大学全体としての取り組みの説明にはじまり、その後各学部、GCI からそれぞれの取り組みについて報告をいただき、最後に外部評価委員の先生方からコメントをいただくという流れで進めさせていただく。

これまで本学が実施してきたオンライン授業の取り組みをどのように評価いただけるか大変興味深い。いろいろなご意見、コメント等は今後の改善につなげていきたいと考える。

2.各学部からの報告

①大学としての取り組み（浜情報教育センター長）

４～５月の取り組みを中心に、説明がされた。

（以下、ビデオに切り替えて説明）

1.開講までのスケジュール

・4/1　授業の 1 か月延期を決定

・4/20　原則、すべての授業をオンライン化することを発表

2.教員へのサポート

・目標：開講日に教員が授業スタートできること

→教員が使える（すでに使っている）システムを支援

・教員のスキル向上機会の提供

→リモート勉強会実施、遠隔授業関連情報集約サイトなど

・結果的にオンライン授業での開講という目標を実現できた

→教材配信システム：B’s LINK、Moodle、Office365 を併用

3.学生へのサポート

・4 月　学生の受講環境についてアンケート調査実施（回答率 80%、4/13 時点）

パソコンの整備が必要な学生　20～30%

インターネット接続環境整備が必要な学生　10%

双方の環境整備が必要な学生　5%未満

・具体的なサポート体制

質問受付メールアドレスを設置

PC・Wifi ルータ無償貸出（5 月より随時、8 月より本格貸出開始）

→貸出実績：PC202 台、Wifi ルータ 125 台

4.教学運営の実際

・履修登録

B’sLINK、Teams、Moodle を活用し、教職員・学生で登録負担を分散

・教材、課題提示

原則、オンデマンド配信（データダイエットの観点から）

語学、ゼミなどディスカッション形式の授業にはリアルタイム配信を適用

クラウドを活用してパフォーマンスを確保

SARTRAS 申請、学内講習会を実施することで改正著作権法に対応

・課題提出、成績評価、フィードバック

それぞれの教材配信システムの機能を活用して運用

・オンライン試験

本人確認、カンニング対策が課題

→オンライン試験の留意点を提示し、盗用チェックシステムを試験導入

・システム選定の視点

Teams、Moodle を採用した理由

→学籍番号によるアカウント、カリキュラムマップなどが反映可能

セキュリティ審査に適合

本年度はサイバーセキュリティ保険にも加入

クラウドサービスを活用し、アクセス過多でもシステム停止を防止

5.今後の展望

・サポートの充実

ICT に強い学生をアルバイト雇用して授業支援する仕組みなどが必要

・ハイブリッド教育運営への対応

対面・オンラインへの対応

次年度に向けてハイフレックス（HyFlex：Hybrid-Flexible）型の検討が必要

・教学マネジメントへ展開

教学 IR を意識してデジタルトランスフォーメーションを推進する必要がある

②外国語学部（甲斐田先生）

教員と学生へのアンケート結果をもとに発表された。

（アンケート 8/5～8/9 に実施　回答数：教員 93 名・学生 575 名）

○オンライン授業全般について（学生）

・学生全体：「満足」「どちらかというと満足」50%超

・1 年のみ：　　〃　　40%超

○対面授業と比較して（学生）

・2 年以上：「満足」「どちらかというと満足」45%超

○オンライン授業のメリット（学生）

・「通学しなくてよい」「通学の時間をほかのことに使える」90%超

・「学修時間に縛られない」「自分のペースで
できる」80%弱

・「繰り返し資料を視聴できる」90%弱

○オンライン授業のデメリット（学生）

・「課題提出が多い」90%超

・「授業を理解しづらい」「コミュニケーションを取りづらい」「目が疲れる」など
➡【学生は十分に学修しているが、コミュニケーションが不十分】という結果が見て取れる。

〇オンライン授業による学生の学修状況（教員）
・「出席状況が良くなった」「課題の提出状況が良くなった」高スコア
・「学生と教員のコミュニケーションが増えた」低スコア
〇【学生は十分に学修しているが、コミュニケーションが不十分】という結果が見て取れる。
〇オンライン授業のメリット（教員）
・「感染リスクを気にせずに学修できる」
・「チャットを活用して質問→フィードバックがタイムリーにできる」など
〇オンライン授業のデメリット（教員）
・「学生が Teams で気軽に質問できるため、自分で調べたりしていない」
・「通信障害で授業に参加できない」など

〇英語科目に関して
・学生の 70%が「ライブ授業に満足している」
・教員の 84%が「ライブ授業にメリットあり」
→学生・教員の双方が肯定的であり、成功しているといえる
一方で「学生同士の横の情報交換ができにくい」などの指摘もあり
〇第二外国語に関して
・学生・教員ともにライブ授業が望ましいと考えている

〇語学以外のオンデマンド科目について
・「授業に満足している」「授業はわかりやすい」6 割超と肯定的（学生）
〇語学以外のライブ授業
・「授業に満足している」「後期もこの形式でよい」6 割超と肯定的（学生）

〇外国語学部教員の取り組み（オンデマンド授業）
・全般に対面授業と変わりない状況を作り出す工夫、ネット環境を考慮した工夫がみられた
〇外国語学部教員の取り組み（ライブ授業）
・小グループでのディスカッション、チャットなどを活用して意見を共有

〇まとめ

・教員も学生もオンライン授業には概ね肯定的
・感染リスクを気にせずに学びに集中できることが最大のメリット
・語学とゼミ以外ではオンデマンド授業で代替できていた
・語学はライブ授業が望ましい
・学生は繰り返し視聴し、学修時間が増え、学びを深めている
・自己管理ができない学生は学修習慣が乱れ、課題の未提出につながる
・オンライン上での双方向の学びの実現、通信環境改善が課題

③経営学部（絹川先生）

〇基本的な認識
・前期オンライン授業　表面的には大きな問題なく終了
・今後もオンラインと面接の併用となれば、いろいろな手を打つ必要がある
・授業形態のみならず、学部の教学マネジメント全般に工夫が必要
・履修人数が多い科目について対応が必要
・学部単体では限界があり、大学全体での対応が求められる

〇オンライン授業を振り返って（経営学部の本年度課題）
・感染リスクを最小化しながら学びの質をどう維持し、学修成果の可視化に結び付けることができるか
→教員 1 人に対して複数の学生を対象とするやり取りが難しい
Teams 上のグループワークに難があり、ZOOM に一日の長がある
・学生たちの状況把握を効率化し、適切な指導を模索する
→将来的には学生を顧客と見立て、CRM 機能を備えた教学 IR を構築して
入学から卒業後までの一元管理が重要となる

〇オンライン授業を振り返って（経営学部の特色）
・履修登録人数が 100 名を超える授業が 40（うち 150 名以上が 15）あり、学部専任教員が 23 を担当
・1 限目の授業に希望者が殺到し、多くの授業で抽選を実施
→学期途中での対面授業再開を考慮に入れて人数を絞り込んだ

〇オンライン授業をどう評価すべきか
・大阪大学全学教育推進機構の例に倣い
「定性的評価を積極的に取り入れる」「ピアレビューを導入する」などが有効か

〇遠隔授業が長期化する中で必要な施策
1.基本的な学修環境整備
→Learning Management System 導入の必要性（著作権法上の問題をクリア）
自前の PC を持ち込みたいという学生のリクエストあり
学修ポートフォリオによる複数学生への対応強化

2.教員の授業対応、成績評価

→Teams や Moodle を利用するのであれば機能強化が望まれる

3.ティーチング・ポートフォリオ導入

→教育理念を起点とした個々の授業の PDCA をエビデンスで示す必要性あり

4.個々の学生の成長をフォローできる教学 IR システムの強化

→一元管理ができておらず、学生の様子の把握が難しい
経営学部の場合 S/T 比 44.6 と本学の中では一番高い
今回のような場合、学生がドロップしていってもよく（状況が）見えない
つまずく可能性が高い学生を予め把握し、つまずかせないことが必要

5.入試判定制度の向上

→どんな学生が入ってきているのか、得られているデータを活用できないか？
活動報告書、成績分布、科目別評定値、1～3 年の成績が横ばいなのか上昇なのかなどのデータを活用し、学生がどうなっているのかを確認したほうがよい

6.LA（Learning Assistant）の育成

→金沢大学では遠隔授業に遠隔で学生が SA 役を果たしている。
遠隔授業が長期化すればするほど、そのような取り組みをしている大学としていない大学との差が広がっていく
SA や LA の育成は差し迫ったテーマだと認識している

④人間学部（文野先生）

○人間学部で 7 月末に FD 研修会を実施し、その際、各学科の教員よりオンライン授業の取り組みついて発表があったので、そのスライドを用いて報告がされた。

○人間学部の教育目標について

・4 つの学科に共通するのは、対人援助・教育職、協同的活動、実証的アプローチという面を重要視

○人間学部のオンライン授業について

・マイクロソフト Teams を用いたオンデマンド授業が主体
・受講生がファイルをダウンロードしたり、動画を閲覧して課題に取り組むスタイル
・7 月から一部の授業に限って対面授業を展開

○オンライン授業のメリット・デメリット（人間福祉学科・コミュニケーション社会学科）

・オンライン授業で大変だったこと
→授業用の資料作り、授業設計、アプリ操作方法の習得など
・授業を実施してみて大変だったこと
→フィードバック、通信環境やアプリの不具合など
・オンライン授業のメリット（教員）

→動画など新しい教材の発見や教科書の活用を見直す機会となった

・オンライン授業のデメリット（教員・学生）

→対面・リアルタイムなコミュニケーションが取れない

対人援助職・教育職の専門家養成にはコミュニケーションスキル向上が重要

・オンライン授業の工夫

→予め教科書の読むべき部分と理解すべき事項を指示した上で、課題に取り組む

WEB 上で小テストを実施して理解を促進

発表資料に対して全員でコメントを返信するディスカッション形式を採用

〇実験実習の事例（心理学科）

・生理心理学の実際の授業では、体にセンサーなどを取り付けて計測する実験を行うが、対面授業が展開できない状況の中、オンラインでも学生が興味を持てるような授業を構築

→ゲームエンジン UNITY（フリーソフト）を導入し、授業に活用

景観による感情の変化をバーチャル空間で体験し、統計的な分析を実施

・オンライン授業を通じて、学生の興味を引き出し、自分で測定・分析する楽しさを伝えることができたと評価

〇体育実技の事例（児童発達学科）

・体育実技をオンデマンドで実施するのは難題

・児童発達学科は主にチームスポーツによる授業がメインだが、それが叶わないためオンデマンドでは「集団的資質」よりも「個人的資質」に軸足を置いた

・実際には「Kids Dance」と「Walking」を理論も加えて体育実技として展開

・「総合表現特講」へ向けた表現力の育成が実現した

・「Walking」は新しい生活様式に寄与する課題であった

・「Kids Dance」では単なる身体表現ではなく、これから実際に保育園などの現場で使っていかなければならない実技として、学生のモチベーションが維持できた

〇まとめと今後の課題

・対面授業と同等の内容を提供することは難しく、質と量の見直しが必要

・4 学年を通じて学生に身につけさせたいカリキュラムをどう実現するか、という視点が重要

・コミュニケーションスキルのトレーニングなど、オンデマンドでは補えないものは授業形態を組み合わせるハイブリッドやライブ授業も検討課題

・個々の学生への対応として、テキストコミュニケーションのスキルも重要

⑤保健医療技術学部（関先生）

〇4 学科分の内容をパワーポイントで説明がされた。

〇発表の趣旨

・専門医療人養成のための実習・演習などの実技を伴う科目が多いという学部の特色をどのような工夫でオンライン対応できるか
・根幹は遠隔学生支援（学生とのコミュニケーション・学生同士のコミュニケーション）

〇理学療法学科「初年次教育科目の経験について」
・1年時に履修する「スタディスキル」は、例年では対面での学生間交流を図るためペア・グループによる展開だが、本年はオンラインによるオンデマンド型で実施し、提出課題などを相互閲覧する方式とした
・対面による学生間交流がなくなったことが大きな課題
・学生の感想や、教員による返信コメントを相互閲覧することで学生の不安を払拭
・テレビ会議形式で学生間交流の場を提供したところ、グループごとに雰囲気の温度差があったり、対人関係の状況把握が難しいといった問題が生じた
・良かった点
→オンラインの方が課題に取り組む姿勢が積極的
チャットなどにより意見・感想が増加
・今後の課題
→学生間交流が少ないこと
それを解消するための教員側のスキル向上

〇作業療法学科「感染防止対策で実施された実習・演習科目の工夫」
・身体障害系科目の教育を通して学生とのコミュニケーションを維持する工夫や、教育効果を高める工夫をした
・複数のアカウントを用いて（ピン止めなどの工夫により）「マルチアングル」の視聴環境を提供し、見せたい箇所をズームするなどの方法で実習室での講義・トレーニングに近づけた
・「ホームルーム」を活用して学生のメンタルヘルスケアを実施
→レクリエーションの場を提供して学生の息抜きを行うとともに、積極的に参加しない学生を把握して個別に対応

〇臨床検査学科「オンデマンド配信と対面実習との併用」
・実際に実習室で行われていることを伝えるために、実験方法をビデオ動画で配信し、その後に実験結果を提示するという方式を採った
・最終的には対面授業も行い、実技試験も実施
・在宅学修時にオンデマンド教材をしっかりと視聴して、実技試験を迎えるという流れをつくり、学修の重要性を認識させることができた

〇看護学科より「老年看護学実習」
・4年生を対象とした需要な臨床実習科目だが、コロナ禍により実習中止
・オンラインで実習オリエンテーションを実施し、学生の不安を払拭

・「コロナ感染症が高齢者の生活に与える影響」を課題とした
・丸善の学修ビデオ無料公開サービスを活用して学修機会を担保
→実際の訪問看護場面を繰り返し視聴して理解を深めた
・教員が高齢者役となったビデオを作製して「病院実習」の学修を促進
→実際の実習記録用紙を用いて課題を提出
・Teams を活用して質問・回答、その共有を図り、協同学修を促進
・チャットを活用したオンライン面談により個別指導・フォローを実施

⑥GCI の取り組み（小林センター長）

○GCI の概要説明
・学部の専門性を重んじつつ、高度な語学・コミュニケーション能力を身に着けるための横断型プログラム（2013 年より継続）
・1 学年 80 名程度の選抜
・それぞれの学部で専門知識・技術を学び、副専攻のような形で GCI カリキュラムを履修
・肝となるのは海外インターンシップ経験であるが、本年度は実施できない

○GCI のオンライン授業
・GCI はグローバルコミュニケーション能力育成が目的であるため、実際に教員とのコミュニケーションが成される授業展開が望ましい。
→オンデマンドは不向き
・コロナ対策会議での了解を得た上で、可能な範囲でリアルタイム＝ライブ授業を展開してきた。
→データダイエットの観点からは好ましくないが、84%がリアルタイム
・ライブチャットを行うランゲージサロンもオンライン化して展開
・夏休み期間を利用してオンライン留学支援を実施し、学生は高い満足度を得られた
→カナダ／トンプソンリバース大学　参加者 9 名

3.学生アンケート結果報告（副学長　福井　勉）

○教学・IR 委員会による「前期授業に関するアンケート」実施結果を説明
回答結果の傾向は下記の通り

○実施結果（オンライン授業のメリット）　そう思う↗　そう思わない↘
・通学しなくてよい、通学の時間を他のことに使える　↗
・時間に縛られない、自分のペースで学修できる　↗
・繰り返し資料を視聴できる　↗
・質問しやすい、教員とのコミュニケーションを取りやすい　↘

・他の学生とコミュニケーションを取りやすい ↘

○実施結果（オンライン授業のデメリット）

・課題が多い ↗

・授業を理解しづらい ↗

・教員とのコミュニケーションを取りづらい、質問しづらい ↗

・他の学生とのコミュニケーションを取りづらい ↗

・目が疲れるなど、健康によくない ↗

4.学部長・研究科委員長からのコメント

○人間学部　椛島学部長

・実体験、フィールドワークというものを、どのようにオンデマンドに読み替えて運営していくか、教員が苦労していた。

・教材を作成するというところにおいて、手探りで前期が終了した。

・7 月上旬より実験・実習科目を少人数体制で、感染防止対策を施して授業を展開。その時に感じたことは、こちらが丁寧に配信し、フィードバックをしっかりすれば学生は個別に先生とやり取りをしているような気持ちで授業を視聴してくれていたと感じた。あまり久しぶりな感じもなく、質問なども出てきた。

・一方で危惧しているのは、1 年生のことである。教員との関係性ができていない中でのオンデマンドであり、単位取得状況が悪い学生については個別に対応し、場合によっては入構許可を取って個別面談を行い状況の把握を行っている。

・後期にこのまま落ちていかないように対策したい。それが退学を減らすために重要な取り組みとなる。

○経営学研究科委員長　新田先生

・アンケート結果や 8 月に実施した全員を対象とした授業でのヒアリングにおいて、教員の思いと院生の間にギャップがあることが判明。

→院生はオンライン授業を高く評価している。

・社会人が多いため、通常は平日夜間や土曜日に通学。感染予防の面からも、あるいは急な転勤や業務が忙しくなるなど、オンラインであれば対応が可能であるという意見が多く、後期も授業科目はオンラインの継続を希望している。

・ただし、ゼミ（演習科目）や修論の指導に関しては対面を希望。

・科目による使い分けが重要であると感じている。

・本学大学院の売りは、小売業ではないが「立地」である。ところがオンライン化となると、他大もオンライン継続を考えており、地方からでも院生を集めることが可能。

→本学の便利な立地という優位性が失われる

・今回のオンラインの経験を活かして、来年以降を考えていきたいと思う。

5.その他質問など

〇杉谷先生

・前期中、文献の利用等に関して図書館の利用はどのような状況だったのか。

→（回答／佐伯キャンパスディレクター代行）

前期については利用を制限し、修士論文作成に関わる修士生と、卒論作成に関わる4年生に入構および利用を限定

・後期はどのような予定になっているのか。

→（回答／福井副学長）

講義科目については原則オンデマンド

演習・実験科目は各学部対応になるが、概ね週1回程度の来校を推奨

〇菊池先生

・浜センター長より、原則オンデマンドで配信というお話があったが、これはあくまでもデータダイエットという側面からの理由か。個人的にはリアルタイム授業の方が効果が高いという認識であり、オンデマンドは逆に授業を作るという点で大変なのでは。

→（回答／浜センター長）

基本的にはデータダイエットを推進

教育的な効果を見ればライブの方が高いという側面もある

インターネットは公共資材であるということ、また大学だけでなく小中高も利用している

また教学IRとの連携という観点からオンデマンドの方が向いているのではないかという今後の検討課題もある

これら2つの観点からオンデマンドを推進している

6.外部評価委員の講評

〇杉谷祐美子先生（青山学院大学教育人間科学部教授）

・話を伺っていて、それぞれの取り組みが個人的にも組織として見ても、大変努力されていることがとてもよく分かる内容であった。

・昨日、本学（青山学院大学）でも学生や教員にアンケートを実施した。その結果と比較すると、こちらの学生さんは満足度が高く、先生方も感じていらっしゃる様子が窺える。

・特に授業開始前に勉強会を8回実施し、非常勤の方も含めて準備がある程度整った形でスタートしている。

・自分の大学を含めて、自己学修型として教材のみを配信して授業を成立させている例もあって学生の評判が悪い中、こちらの大学では非常に熱心に取り組まれていると思われる。
・原則オンデマンドを配信しつつ、週 1 回程度対面の機会を設けるといった時に今後どうしていくか、検討するための材料をお話ししたい。
・1 つは課題の問題。課題が多いことは、どこの大学でも問題になっている。課題量をどう適切に配信していくか。課題の活用の仕方についても予習的なのか復習的なのか、位置づけは個別の科目によって異なる。
・アンケート結果から学修量が増えたことは分かるが、今後は学修時間がどうなっているのかという把握が重要である。
・これまでの大学では授業外学修が不十分で学修時間が少ないのに対して、これまでと比べて学修時間がドッと増えた。本来の単位制の趣旨に則った学修量になっている可能性はあるのかもしれないが、次に課題になるのは、適切な科目数や単位数の設定。
・日本は履修の単位数・科目数が多いので、それぞれに課題が出れば学生は混乱し、過剰な負担となるということは否めない。今後はそのあたりのバランスをどう取っていくのか。単位数をセーブしつつ課題を出していくのか、あるいは課題をセーブしつつ単位数をキープするのか、ということになると思われる。
・もう 1 つは、学生同士のコミュニケーションがうまく取れないという問題。そのコミュニケーションが何故うまく取れないのかを分析していくことが重要。
・自分の手応えとしては、むしろ小グループのディスカッションはオンラインの方が円滑に進行しているように思う。それを教員側が管理できないという問題はあるように感じる。
・ビデオをオフにしていると、間合いを取ったり関係性を作る上で障壁になる。それをクリアした上で、それでもうまくいかないということであれば、オンラインによるものなのか、ディスカッションのスキルの問題なのか、見定める区分になるのでは。
・文科省の政策としてもニューノーマル時代に向けてハイブリッド型という話もある。1 つの授業でオンデマンドと対面をどうミックスさせるのか、また教室の確保や時間割上で可能なのか。今後の大学にとって難題でありつつも、重要なことである。
・非常勤の方へのサポートなどをどうしていくのか。仕事をしていく上で、非常勤の方のご苦労も多いかと思われる。組織的にうまく進められれば良いと思う。

○川島哲二先生（京都産業大学経営学部教授）
・先生方個人も、大学も、学生もここまでよく対応されてきたことに敬意を表したい。
・私の勤務校も同様の状態で、本当にオンラインでそんなことができるのか、という懐疑論が支配していた。しかし、やってみればどうにかなった、という状況。
・予想と異なり、学生からのオンデマンドの評判がさほど悪くないということが意外で

あった。

・オンデマンドの授業を丁寧に工夫したということもあるが、寄り合ってコミュニケーションを交差させながら学修する「バズ型」から、「自己調整型」の学修でスマートに自分のプランの中でこなしていくという、大学の学修そのものが大きく変わっていくのではないか、と感じた次第である。

・今起こっていることは第 1 幕が始まったにすぎないのかも知れず、ニューノーマル時代のハイブリッド型になっていくのであれば、リアルの授業とオンデマンドの授業をどう組み合わせていくのか。

・今日のお話の中で、カリキュラム全体の中での習得内容の再構成と授業形態の組み合わせの検討という件があったが、そこのところが非常に問題になると思う。

・大きく大学改革の流れを注意深く見ていくと、これからオンデマンドの授業が世間の目に晒されてそれが精緻化されていくと、科目の大学間共通化というのも話題になる可能性がある。これは大学経営の観点からみれば合理化・効率化につながるわけなので、そのような動きと今回の遠隔学修が組み合わされていくという、大きな流れの方も見ておく必要がある。大学間を超えた授業の統合もあり得るのではないか。

・法令上は 124 単位のうち 60 単位までメディアを使った授業は可能。極端な話だが、通学は 3 年間で残りの 1 年はリモートでよい、という組み合わせもできなくはないのかもしれない。カリキュラム開発、プログラム開発でのアイデアと手腕がこれからの大学に問われると思う。

・1 年生がロストジェネレーションになりかねない。キャンパスライフを根こそぎ奪われてしまった世代といえる。保健医療技術学部の発表で遠隔学生支援の取り組みという言葉が出てきたが、学生支援が大切であり、それに対してどのような窓口を用意できるのかが問われている。

○菊池重雄先生（玉川大学教学部長　経営学部教授）

・よくこの短期間にここまでやってこられたな、というのが素直な感想。

・オンデマンドの授業を作るのは時間がかかることであり、特に保健医療技術学部については、よく短期間で作られたと感心した。

・外国語学部でバランスを考えてライブを増やしたということも、よく早い段階で気付かれた。

・経営学部では成績評価の問題が出てきたが、タイムリーに返却することができればそれほど難しい問題ではない。返却が遅れているのであれば、オンライン授業の問題点ではなく、本来の教育の質の問題ではないかと感じた。

・人間学部はリアルにすべきかオンデマンドすべきか、難しい問題を抱えている。

・GCI がライブのバランスを多く取ったのは頷ける。

・私の専門は高等教育でもあるが副専攻であり、スタートはオンラインであった。

・1995 年に日本 IBM とコンピュータを使った授業がどこまでできるか、という共同研

究を始めた。その時 IBM が LOTUS ノーツという会社を買収し、オンデマンド形式のシステムを作ったが、その後にライブ配信ができるセイムタイムというシステムを構築。

・そのような背景があるため、私個人としてはコロナ感染症の大きな問題が起こらずとも、もっと早くから大学はオンライン授業を導入すべきだと思い続けてきた。

・オンラインという言葉は非常に曖昧に使われている。レポートの課題を出させる通信教育のこともオンラインと呼ばれていて、オンデマンドもオンライン、ライブ配信もオンラインであり、幅の広い言葉として使われている。

・改めて大学ごとに、あるいは社会全体でオンラインがどういうことかを明確にする必要がある。

・1 年生の不満が多いという状況がどこの大学にもあるが、これはオンラインによる不満ではなく、1 年生への連絡が遅れたから不満があるのではないかと思う。

・1 年生に最初からオンラインで授業することを伝え、早い段階でライブ配信でお互いの顔が見え、教員の顔が見える形で授業を進めていれば、ここまで 1 年生が「置いて行かれた」という感覚を持たないのではないか。そのような観点から、ライブ配信授業は意味があることだと思っている。

・上級生になればなるほどオンデマンドが生きてくる。特に大学院生にとって有意義だと新田先生からお話があったが、学問の方向性が決まっている人に関してはオンデマンドでも十分だと思う。

・悩みながら大学に入ってきて、どうしてよいか分からない人たちに、いきなりオンデマンドを配信しても効果は薄いのではないか。

・一方で、専門性を考えたときに学問分野によってオンデマンドがよいかライブ配信がよいかは異なってくる。

・その意味では、人間学部の学科によっては、さらに保健医療技術学部などはオンデマンドに向いていると思われる。

・東京農業大学などはコロナ以前から実験をかなりの程度、オンデマンド型に切り替えてきている。経費の削減であるとか、より安全な実験ということを目指してきているので、コロナの影響でオンライン化が進むというのは少し残念。

・ゆえにコロナ禍が過ぎてもオンデマンド授業のコンテンツは使えるのではないかと思う。

・学生がオンライン授業に不満を持つ、もしくは教員がオンライン授業では埒があかないと考えたときに、それは本当にオンライン授業のせいなのかという問題がある。

・そもそも学校に来るという一連のプロセス、通学時間そのものが学問に向かうメッセージとして伝わっているのではないか。そのプロセスがないオンライン授業が不満なのであって、オンライン授業そのものには不満がないのではないか。

・その意味では、オンライン授業であっても学問に向かうある種のメッセージを伝えな

ければいけないのではないか。例えばオンライン授業でも出席を取るなど。

・それぞれの学部の専門性がネットワークの授業にどのようにうまく当てはまるのか、学問分野から検討されることが有意義なのではないか。

・座学が当然と思われる分野の学部であっても、上級学年になればなるほど自分の問題意識がはっきりしてくるので、もっとオンデマンドを活用すべき。

・トータルとして、2 月から準備をして今の時期にオンデマンドがここまで評価されているというのは、私が知る限り他の大学と比べて文京学院大学が抜きんでていると感じる。

7.櫻井学長より

・3 名の先生方、本日はありがとうございました。

・温かいお言葉もいただきましたし、今後も心していかなければならないという言葉もたくさんいただきました。

・どちらかといえば、我々は今のこのコロナ禍での授業をどのような形でやっていくかに注力してきたわけであるが、菊池先生からもありましたように、コロナ収束後のオンライン教育を考えていかなければならない。

・さらに川島先生はその先の、科目の大学間共通化という先の話ではありますが、いずれはそのような時代になってくるのではないか、短期・中期・長期的な視点に立ってこの問題を考えていななければならないということで、3 先生からは示唆に富むお話をいただいた。

・先生方にあらためて御礼申し上げます。ありがとうございました。

8.島田理事長より

・励ましを含めた評価のコメントをいただき、ここにいる全員が、やってきたことが間違っていなかったのではないかと、自信を深められたと思う。

・そして次のステップに向かう大きないい機会になったと、ありがたく感じる。

・法人や理事会は環境・空間を用意するのが一つの大きな機能である。これまでキャンパスという空間や環境を用意してきたわけであるが、そこを十分に活かせないという状況下にある。

・そもそも大学のキャンパスとは、学生や教員がそこで偶発的に意外なものを感じたり、発見したり、刺激を受けたりするところ。予想外とか意外性が人と人が触れ合う機会にとって大事。

・今後は意外性や刺激を受けるといったことをリモート空間でも提供しなければいけないと改めて感じた。リモート空間だからこその意外性の探求に学園や理事会サイドも

取り組んでいきたい。

以上をもって令和２年度外部評価懇談会が全て終了し、福井副学長が閉会を宣した。